

小説

消費者金融

クレジットカード社会の罅

6月22日
有効期限 08/98

RYO TAKASUGI

高杉良

講談社文庫



しょうせつ しょう ひ しやきんゆう クレジット しゃかい の ぐな
小説 消費者金融 クレジット社会の罠

たかすぎ りょう
高杉 良

© Ryo Takasugi 1996

1996年11月15日第1刷発行

1998年3月24日第6刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——信毎書籍印刷株式会社

印刷——信毎書籍印刷株式会社

製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。(庫)

ISBN4-06-263392-2

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

江苏工业学院图书馆

藏书章
說消費者金融

クレジット社会の良

高杉 夏

講談社

目次

第一章	バージンロード	5
第二章	夜叉の如く	33
第三章	行政指導	86
第四章	驚異のCMコピー	134
第五章	光栄あるモルモット	168
第六章	家庭崩壊	194
第七章	パツイチに非ず	223
第八章	二セツトの百科事典	262
第九章	女性業務執行者	296
第十章	沈む人・浮かぶ人	335
第十一章	弁護士会の喚問	357
第十二章	休日返上	388
第十三章	危機的状况	427
第十四章	息子の転身	462
第十五章	天命を待つ	481
第十六章	“ローラー”訪問	514
解説	佐高 信	538

単行本『座礁』（一九九四年四月 小社刊）を改題

第一章 パーキンロード

1

明け方に降り出した雨は、十時ごろから本降りになった。

篠突く雨の中を玉崎家の家族四人が自家用車で世田谷の下馬から目黒の結婚式場へ向かったのは、平成四年五月九日土曜日の午前十一時過ぎだ。

マンション地下一階のガレージからエントランスまでセドリックを運んできた英雄を運転席からリアシートへ移動させたのは、早苗である。

「きょうはママにまかせてね。花婿のヒデ君はうしろへどうぞ」

「ママの運転だとノロいからいらつくんだよな」

英雄は唇を尖らせたが、弥生が早苗に加勢した。

「なに言ってるの。お兄ちゃんの荒っぽい運転よりずっといいわ。事故でも起こしたら大変

だから、ママの慎重運転で行こうよ」

「そうだな。ママに頼もう。信号で『黄色当然、赤勝負』が英雄の主義らしいが、悪い心がけだな」

英太郎にも反対に回られた。三対一では引き下がりざるを得ない。英太郎はモーニングを着ていた。

英雄はリアシートに替わるなり隣の弥生を小突いた。

「パパに告げ口したのはおまえだな」

「『黄色当然、赤勝負』のこと」

「うん」

「そうよ」

「冗談を真に受けるやつがあるか」

「本気でしょ。お兄ちゃんに乗せてもらって何度も恐怖の体験してるもの」

「オーバーなことを言うなよ」

「さあ行きますよ」

セドリックはワイパーを激しく作動させながら走り出した。

玉崎英太郎は五十三歳、妻の早苗は四十一歳、長男の英雄は二十五歳、長女の弥生は二十一歳、英雄と弥生は先妻の子で、英太郎は早苗と再婚して二十年になるが、二人の間に子供はなかった。

英太郎はゴマシオの毛髪のせい年齢のわりに老けて見える。逆に早苗は三十四、五にしか見えない。親子と間違えられることが多いのも仕方がなかった。

早苗は口紅を引くぐらいで、化粧は至って淡泊である。

きのう美容院でセットしてきたが、若い頃からショートヘアで通してきた。色白で目鼻立ちが整っている。いまでも街を歩いていて視線が集まるくらいのプロポーションを保持していた。

上背もあり、長い二枚目の英太郎だが、早苗と歩いていると野暮ったく見える。

英雄は百八十センチの長身で、父親より五センチほど高い。三年前大学を出て大手家電メーカーに就職した。

女子大英文科四年生の弥生は、十人並の平凡な面持ちだ。「ママと一緒に歩くと引き立て役にされるから、おもしろくないんだよねえ」とぼやきながら、けっこうショッピンングなどにつきあっていた。

目黒通りに出るまで三十分ほど要した。土曜日に大雨が加わって道路はひどい渋滞が続いている。

「これじゃ、誰が運転しても同じね。歩いたほうが速いくらいよ」

「うん。しかし、この雨じゃ歩くわけにもいかんだろう。時間はたっぷりあるからゆっくり行くさ」

助手席の英太郎は早苗に返してからバックミラーを見上げた。

リアシートの英雄と弥生は肩を寄せて話に夢中だ。

「きょう仏滅なの知ってた」

「もちろん知ってたさ。だから式場が取れたんだ。キリスト教式でやるから仏滅は関係ないし、料金も割引きだから、悪くないよ。この雨は計算外で参ったけど」

英雄は窓外に眼を遣った。

弥生も外に眼を流した。

「弥生さん、可哀相ねえ。タクシーつかまったかしら」

「昨夜のうちに個人タクシーを手配したはずだから心配ないよ」

「ふうーん。兄嫁がわたしと同じ名前っていうのも、なんだか変な気持ちだなあ。なにも三月生まれだからって弥生にすることもないのに」

「そうか。俺は逆だな。高一のとき、あいつと仲良くなったのはそれがきっかけだもの」

「高一のときのクラスメートとよくぞ十年もつきあってたねえ。あげくの果てにゴールインなんだから、お兄ちゃんは気が長いっていうか、ひいき強いよ。よく飽きなかったねえ」

「莫迦^{ばか}言うなよ。飽きるわけないだろう。あいつほどの女はそうはいないからな。同じ弥生でも大違いだ」

「妹に対してのろけてれば世話はないや」

「だいいちにここが違うよ」

英雄は左手の人差し指で弥生の頭を押した。

「言えてる。数学科出てるんだからかないっこないよ。わたしの二倍、お兄ちゃんの三倍はいいね」

「ふざけるなよ。俺といい勝負だろう。俺の頭脳も並じゃないからな」

「さあどうかなあ」

「でも、ここはこっちの弥生のほうが上かもな」

英雄にほったをつつかれて、弥生はげらげら笑い出した。

「見えずいたお世辞言ってる。なにか魂胆あるんじゃないかって勘繰りたくなるじゃん。それこそ勝負にならないよ」

「わかってればいいんだ」

「フンだ。それをわたしに言わせたかったんだね」

弥生は頬をふくらませてふいと横を向いた。

英雄がご機嫌をとりむすぶように、弥生にしなだれかかった。

「おまえの取り柄は性格のよさだよ。顔だって可愛いし、自信持てよ」

「性格ブスだって言いたいくせに」

弥生はふたたび顔をそむけた。

セドリックは目黒通りと山手通りの交差点を通過した。

英雄と弥生のおしゃべりは一分ほど途切れただけで、すぐに始まった。

「お兄ちゃん、弥生さんのお母さんとほんとに別居するの」

「弥生と二人がかりで社宅に住もうってすすめたんだけど、テキは別居したいってきかないんだから、しょうがねえよ」

「新婚夫婦に氣を遣ってるのかしら。それとも素敵な恋人がいたりして。あのお母さん、四十八にしては色氣たっぶりだもん」

「莫迦、下品なこと言うなよ」

英雄は左手で弥生の右肩をぶった。

「そうかなあ。どうして下品なのかなあ。恋人がいたっていいと思うけど」

「そんなの、いるわけねえだろう」

「お兄ちゃん、どうしてむきになるの」

「うるせえなあ」

こんどは英雄が横を向いた。

弥生が話題を変えた。

「弥生さん、会社どうするの」

「共稼ぎに決まってるだろ。あいつのほうが給料高いし、子供は当分つくりたくないって言うてるからな。五、六年は働くつもりだろうぜ」

「せっかく総合職で都銀に就職したんだもんねえ。いま辞めたら勿体ないよ。だけど地方に転勤になったらどうするの」

英雄は小鼻をうごめかした。

「あいつは本店のコンピューター部門だから総合職でも転勤の心配はまったくないんだ。その心配は俺のほうは大いにあり得るけど、そのときは別れ別れに暮らすしかないかもな」

弥生が英雄に駄を寄せて、小声で言った。

「親同士がバツイチっていうのも、なにかの縁かねえ。類は友を呼ぶって言うけど」

「あいつの母親は再婚しないで、娘のためにひたすら頑張ったんだから立派だよ。セイホのおばちゃんやりながら娘を大学まで出したんだぜ。母親の鑑かがみだよ」

英雄が声をひそめてつぶけた。

「ウチのママはもっと立派かもな」

「お母さん、弥生さんをお兄ちゃんに取られちゃって、独りにされちゃうなんて可哀相だなあ」

「母と娘がベタベタしてるのも、あんまりいいもんじゃねえぜ。独りになって伸び伸びするかもしれないし、さっき、おまえも言ったけど、もしかしたら恋人があらわれるかもしれないし、人間先のことはわからないよ」

「まあねえ。そうかもしれない。ところで弥生さんのお父さん、まだ行方不明なの」
「うん」

ぽつと答えて、英雄は口をつぐんだ。

英雄は五歳のとき別れた実母の顔をふと眼に浮かべた。実母の山岸かほるは名のある劇団の幹部女優で、テレビや映画にちよくちよく出ていた。

玉崎英太郎は、息子と娘の話を聞くともなしに聞いていた。英雄が急に声をひそめたので、聞き耳を立てたが、ほとんど聞き取れなかった。

「親父がこないだ変なことを言い出したんだ。実の母親を結婚式に呼ばなくていいかって」「バツカみたい。なに考えてんだろう」

弥生の声がつい高くなった。

英太郎がうしろをふり返ったので、弥生は肩をすくめた。

英雄はいっそう声量を落した。

「冗談じゃないよなあ。ママに悪いだろう。ママの気持ちを考えたら、そんな発想できるわけないよな」

「そうよ。あの女は、わたしたちを捨てて男と駆け落ちしたんでしょ。わたしは親子とってないわ」

英太郎に子供たちの話し声が届かなくなった。

2

車は一時間前に八紘苑はつこうえんに着いた。仏滅にしては式場は盛況で、けっこう混んでいる。大安吉日よりも土曜、日曜日に拘泥こうでいする傾向のほうが強いということなのかもしれない。

早苗は黒っぽいワンピース、弥生は淡いピンクのワンピース。英雄は式場でモーニングを

調達した。

花嫁の佐藤弥生も然り^{しか}で、ウェディングドレスもレンタルだ。新郎新婦ともクリスチャンではないが、教会で挙式することになったのは、佐藤弥生がウェディングドレスに固執^{こしつ}したからにはかならない。神仏挙式でも、お色直しで着る手もあるが、純白のウェディングドレスは神主より牧師の前のほうがずっと映える。

控室で桜湯を飲んでいるところへ花嫁の母親と伯父が挨拶にやって来た。二人は濃紫^{こむらさき}のワンピース姿とモーニング姿だ。

佐藤牧子が伯父を玉崎夫妻に紹介した。

「兄の勇一です」

「初めまして。弥生の伯父の佐藤勇一でございます。よろしくお見知りおきください。英雄君には何度かお目にかかっております。ほんとうに近ごろ珍しい好青年で、弥生も幸せな娘です」

「恐れ入ります。英雄の父親の玉崎英太郎と申します。英雄のほうこそ弥生さんのような美人で明るいお嬢さんと添い遂^そげることができまして願ってもないことです。家内も娘もよろこんでおります。家内の早苗と娘の弥生です」

「よろしく願います」

早苗が佐藤に向かって低頭すると、弥生もそれにならった。

「そうですってねえ。お嬢さんも弥生さんとおっしゃると聞いて、うれしいやらびっくりす

るやら……」

佐藤は愛想笑いを絶やさなかった。

牧子がにこやかに言った。

「娘が二人になって、わたくしもうれしいわ。弥生さん、仲良くしてくださいね」
結婚式の控室で立ち話が続いていたが、佐藤勇一が思い出したように言った。

「お名刺をちようだいできますか」

佐藤はワイシャツのポケットから名刺入れを取り出した。

あわてて玉崎英太郎も名刺入れをさがした。

「申し遅れまして」

「こちらこそ」

佐藤の名刺の肩書は「江東信用組合理事」とあった。英太郎のほうは「株式会社クレジツト・コレクション・サービス（CCS）取締役社長」である。

CCSの本社は青山のオフィスビルにある。札幌、仙台、名古屋、大阪、高松、広島、福岡、宮崎、那覇に支社を置き、従業員は約二百名、資本金は二億円。

「クレジット・コレクション・サービスとおっしゃいますと、債権の回収みたいなの……」

「ええ。取り立て屋です」

「ほう。当方と多少ご縁があるようですねえ」

佐藤の口調に皮肉っぽい響きが伴ったので英太郎はあわて気味に言い足した。

「コンピュータシステムによる信用調査、それと債務者のカウンセリングにも力を入れます」

不払い債務者などの弱者いじめと取られてはかなわない。むしろ弱者救済を基調としている点がミソなのだと英太郎は言いたかった。

二人が同時に相手の名刺を名刺入れにしまった。

「きょうは兄に弥生の父親役をやってもらいます」

牧子が唐突に口を挟んだ。

佐藤が照れ臭そうに頭を掻いた。

「そうなんです。これが頑張り屋なものですから、わたくしは弥生に対して父親がわりらしいことはなにひとつしておりません。晴れ舞台でいいところだけ取ってしまうように気が引けますが、教会の結婚式で花嫁と腕を組んで牧師の前に進み出られるなんて、一生に一度の光栄です。わたくしは娘はおりませんのでゆうべから興奮しっぱなしです」

「それは羨ましい限りですねえ」

「あなた、ウチの弥生のときも教会で式を挙げるようにすればよろしいわ」

「しかし、親が決められるものでもないだろう。だいたい弥生はボーイフレンドもおらんんじゃないか」

「失礼ねえ。掃いて捨てるほどいるわよ」

弥生が英太郎を睨みつけたので、笑い声が室内にあふれた。